高岡短期大学紀要　第17巻　平成14年３月
Bull. Takaoka National College, Vol.17, March 2002

『高岡短期大学紀要』第17巻（新シリーズ第２巻）について

学長　蝋　山　昌　一

高岡短期大学は地域に生きる短期の高等教育機関として、いわゆるアカデミズムの枠を超えて知的な活動を展開することが期待されている。それ故、その知的活動報告の形式も多様なものでなければならず、また、独善を排し多くの読者を惹きつけるものでなければならない。こうした判断から『高岡短期大学紀要』は2001年の通巻第16巻から新しい方針のもとで編集されることとなった。幸い第16巻では、例えば万葉線（高岡・新湊間の路面電車）のあり方に関する問題についての論考や古代鋳造技法の再生の記録など、新シリーズの趣旨に沿った論文を収録することができた。本巻は新シリーズの第２号であり、いわゆる大学問題に関する論文を意識的に収めることとなった。

いま日本の大学は第２次大戦後初めての大きな曲がり角に立っている。とくに国立大学は、昨年６月に文部科学大臣が「（国立）大学の構造改革の方針」（いわゆる遠山ペーパー）を明らかにして以来、再編統合や法人化など従来の枠を超えての、それこそ抜本的な改革に迫られている。本学は昨年度の概算要求（３学科体制への組織変更）を一昨年度に行って以来、法人化を視野に入れての将来構想を模索してきた。そこに遠山ペーパーが表明され、今後は本学単独で独自路線を貫くのか、それとも他大学との再編統合の道を歩むのか、きびしい選択に迫られることとなった。そこで得た結論は、第１に、本学が短期の高等教育機関としてこれまで築いてきた良き伝統をこの高岡の地で継承できるのであれば、再編統合を選択すべきであること、しかし、第２に、その場合でも単に他大学と合併するのではなく、再編統合後にはこれまでにない新しい高等教育研究機関に生まれ変わらねばならず、第３に、それには当初から明確な新大学創設の構想をもって他大学との再編統合に臨まなければならないということであった。こうした観点に立って、本学は県内に存在する他の国立大学（富山大学、富山医科薬科大学）との再編統合に積極的に取り組み、新大学創設の構想を練り上げ、この構想ないしはそれを凌駕するビジョンを実現できるよう努めてきた。残念ながら、本稿執筆の時点ではまだ３大学の合意は成立していない。しかし、この帰趨がどうであれ、いま大学なかんずく地方の国立大学は自らの存在意義を改めてとらえ直し、自己改革に取り組まねばならない現実には変わりはない。

本巻の編集に当たって大学のあり方に関する論稿を学内外で募ったのは、こうした現実があるからである。思いもかけず多くの論文が集まったことは、編集者の望外の喜びである。ここでそれらをひとつずつ紹介する必要はあるまい。読者には直接それらに目を通していただきたい。しかし、学外者として地域の視点から大学再編統合のあり方についての考えをまとめ、寄稿された向井文雄氏（北陸経済研究所）にはこの場を借りて改めて御礼を申し述べたい。先の第16巻においては山崎正和氏の特別講演会での講演録を「情報化時代の大学」として収録させていただいたが、向井氏の論文はこれに続く学外からの寄稿で

あり、開かれた大学という本学の趣旨を如実に表したものとして自負の念を強く抱いている。

この紀要に掲載されている論考のうち、大学に関連する問題を扱ったもの以外で、タイトル・ページの肩に印のない論文はそれぞれの執筆者が自由に自らの責任でその知的な活動の一端を披瀝したものである。ここから本学の活動の多面性をご理解いただければ、幸いである。さらにタイトル・ページのヘッダーに「－論文－」などと種別の印されているものは、第15巻までと同じ編集方針に従い、学内審査を経て掲載されることになったものであり、どちらかと言えばアカデミズム志向が強い。本紀要を手にした読者が高岡短期大学の知的な活動に関心を寄せ、本学へのよき理解者となられることを期待したい。

（2002年２月記）